
一円玉、巡る

霧途雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一円玉、巡る

【コード】

N9089J

【作者名】

霧途雲

【あらすじ】

「もう一度僕が君の手にこの不格好な一円玉が戻ってきたら、そのとき僕らは会おう」それきり黒いスーツの男と綺麗な黒髪の女性は別れた。

黒いスーツを着た男は財布から出した一円玉硬貨をライターで炙り、片面真っ黒な世界に一つだけの一円玉を作り上げる。それは簡単な錬金術であり、些細な違法行為だった。でも生憎、真昼間のカフェテラスで行われる世界一小さな錬金術を取り締まれるほど警察は暇ではないのだ。男は白い丸テーブルを挟んで向こう側に座る女性の目の前へその一円玉を持って行き、片面の銀色の側ともう片面の焦げた側を交互に確認させる。女性は机の上に小さくてまるで小動物が餌を啄んでいるような形の両手をきれいに載せている。その白くしなやかな指は、しかしながらモナ・リザのそれほど美しくない。

男は言う。

「この店で僕はこの一円玉を使う。だからこの一円はいったん店のレジの中へ入る。そしておそらく今日中に僕らの会計を担当したのとは別の店員がレジに入ったこの一円を別の客に釣りとして手渡すんだ」

「うん」と女性は従順な相槌を打つ。

「奇妙な一円玉を受け取ったその誰かは、こんなもの早いとこ使っ
てしまおうと、店から出てすぐのあのコンビニで適当な買い物をして、一円を処分するかもしれない。コンビニのアルバイト店員は別の客に何も知らず一円玉を手渡すかもしれない。こうやって今僕の手元にあるこれは、しばらく僕らのもとを離れて世の中を巡るんだ」
美しい曲線を形作る両肩にちょうど届く黒髪は、テラスの優雅な照明を誠実に受けとめてしなやかに揺れる。女性は差し出された一円玉を素直な視線で見つめ、男の口から話の続きが紡がれるのを待つ。男は言う。

「もう一度僕が君の手にこの不格好な一円玉が戻ってきたら、そのとき僕らは会おう」

それきり黒いスーツの男と綺麗な黒髪の女性は別れた。

アダムもエバも言葉というものを持たなかった。厳密な表現を用いるならば、言葉という概念を知らなかったということになるのだが、比喩的な表現を採用するならば、やはり言葉という人類史上最も偉大で最も厄介な発明品を、二人は持っていなかったのである。

それでもアダムは何不自由なくエバを愛することができたし、エバも何不自由なくアダムを愛することができた。朝になれば小鳥の囀りで彼らは目覚め、日中は波が陽光を照り返してちらちら輝くのを飽きるほど眺め、夜になれば何億光年と離れた場所に在る星の命を共に慈しんだ。もっともその当時は時間や空間という概念自体が無かったわけだから、アダムは澆漑とした裸体を恥ずかしげもなく晒して、文字通り永遠の中に生きていたのだった。そしてそれはエバについても同じだった。

ところがある時（ご存じの通りそれは具体的な時制を持たないわけだ）、蛇の誘惑によってアダムとエバは秘密の園に実る甘味な林檎を齧ってしまう。アダムは神に背くその罪をエバに押し付け、エバは神に背くその罪を蛇に押し付ける。事実がどうあれ二人のあいだに《恥じらい》が誕生し、それから歴史の大きな歯車はがちゃんと大きな音を立てて廻り始める。

重い腰を上げた偉大なる歴史はその後一度たりとも絶える事無く、まさに永遠に、世界中のありとあらゆる物事を紡ぎだしていく事になる。

ありふれた駄作と少しも変わらない。この物語にも《悲劇》という使い古しの常套手段が採られるわけだ。つまり黒いスーツのあの

男は何年後かの冬、夜道を一人でぶらついていたらところを歩道に乗り上げた飲酒運転の自動車に押し潰され、自らの発声器官と利き腕一本を失う。髪は綺麗なあの女性の方は持病が悪化して脳神経が蝕まれ、葛藤の末、手術によって灰色の余命と引き換えに記憶の全てを失うことになる。

要約すると男は主要言語を失い、女性は記憶を失い、それでいて生命の維持は百パーセント保証されていたのである。それでも一度ぐちゃぐちゃに破壊された人生を再び一から創造し直すのにはやはり想像を遥かに超えるだけの歳月と苦悩を要した。男にとっても女性にとっても、人格を再構築するため費やした歳月はおよそ何億光年にも感じられた。その過程で髪の色や指のしわや背中の骨などには老いの影がじわりじわりと着実に浸み込んでいった。銀と黒でできた奇妙な金属の塊は、その間、二人とは関係のない別の世界をぐるぐる廻り続けた。

昔話は新たな展開を生む。神からの追放を受けた人間はあつという間に墮落し、世界は一度大洪水に吞まれる。或いは人間の墮落は不可避的事実に思われることであろう。人間は神ではないから人間なのだから。とにかく、方舟で難を逃れたノアという敬虔な男が人類にとって第二の祖先となるのだった。

人間の知恵はもともとが不正に入手した果実なのだ。神にも届く巨大な塔はいずれ必ず建設されてしかるべきである。ところが神に近づこうとする人間の狡知の塔は、神に触れるどころか神の怒りに触れた時点であっさりと崩壊する。建設の責任の所在はどこにも残らない。なぜなら神は人類から共通言語を奪ったからだ。それからというもの、世界には人類共通言語など一度たりとも創造された事はない。それは人類の知的汚点として圧倒的な事実である。これは作り話ではない。

五月の、清々しい風が吹く朝だ。穏やかな世界を満たす今日の日の陽射しは幸福の表象そのものだった。賑わう街の通りをある若者はすたすたと脇目も振らず歩き、ある夫婦は何やら忙しい世間話をしながら歩き、ある老人は杖を片手に散歩している。

老人は通りの一角に雰囲気の良い喫茶店を見つけたので、そこでモーニング・サービス付きのコーヒーを飲むことにした。老人はテラスに空席を見つけて座り、メニユー表を指さしてその店で一番安いコーヒーとモーニング・サービスのセットを注文した。陽射しを全身で浴びてから新聞を読み始めた。

老人はどんな記事にも隅から隅まで丁寧に目を通した。時の経過を忘れ、世間で起こっているあらゆる目まぐるしさを老人は微笑む。一面を読んではその分厚い眼鏡をぼってりした鼻から外し、それを白い丸テーブルの上にそっと置いて、いつの間にか運ばれていたコーヒーをゆっくり飲んだ。

老人がこの喫茶店に抱いた好印象はそのまま好意に変わった。ウイトレスの若い娘はとても親切に老人に接したのだ。娘の魅力は外側だけでなく、むしろ内面にあった。新聞を熟読する朝の喫茶店の客に対して、店員は無でなければならぬ。娘はその鉄則を知っていてわざとコーヒーをそっと無言のままに置き、去ったのだ。老人にとって最高の接客だった。それから何より、娘は手話ができるのだ。声がかまく出せない老人にとって、それはとても幸運なことだった。老人はしばらくしてその娘を呼び、コーヒーのお代わりと別の新聞を持ってきてくれるよう手話で頼んだ。老人の手話はほかに比べて片手しか使わないという点で特殊だったが、娘は嫌な顔一つせず、そして何の困難もなく理解してくれた。

娘はきつと母親にしっかりとしつけられたのである。そしてその母もまた、自らの母親にしっかりとしつけられたに違いない。しつ

けとは遺伝に他ならないと老人は信じた。

比喩的な遺伝でなく、生物学的な遺伝の方も娘にはあった。娘は母親同様にとても美しい髪をしていたのだった。そしてまた、その母の髪も親の遺伝に他ならなかった。

それからどれくらい経っただろう。物語はこの五月の朝の風のよ
うに、とてもさりげなく閉幕を迎えるのだ。

老人は新しい新聞を読み終えた。そしておいしいコーヒーと幸福な陽射しと、かわいらしい娘に感謝した。老人は杖をとり、曲がった腰を椅子から上げて勘定に向かった。勘定があの娘であればいいと思ったが、娘はほかのテーブルの接客を眩しいほどの笑顔でやっていたため、老人の小さな願いは果たされなかった。娘の代わりに奥からやってきたのは喫茶店のオーナーである銀色の髪をした老婦人だった。老人は何も言わず（もっとも何も話せないのだが）、黒いスーツのポケットから千円札を出す。婦人はレジを使わず、暗算でお釣りを計算し、それをあの娘に劣らない素敵な微笑みで黒いスーツの老紳士に手渡す。何億光年ぶりの景色がテラスに灯る。

「素敵な髪ですね」と老人は何気なく老婦人に言う。

「ありがとう、約束の一万玉よ」と老婦人はお釣りを渡す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9089j/>

一円玉、巡る

2011年1月16日09時04分発行